慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	イギリス職能別組合の生成過程（その一）： 産業革命前夜における労働者階級の組織形態について（毛織物業労働者）
Sub Title	Formative process of trade union organization at the eve of industrial revolution in England
Author	飯田, 鼎
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1965
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.58, No.5 (1965. 5) ,p.339(1)- 369(31)
JaLC DOI	10.14991/001.19650501-0001
Abstract	
Notes	論説
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19650501-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

新刊紹介

藤田敬三著『日本産業構造と中小企業』……植　草　益 149
——下請制工業を中心にして——

外務省編著『国連貿易開発会議の研究』……大　山　道　広 150

イギリス職能別組合の生成過程（その一）

——産業革命前夜における労働者階級の組織形態について（毛織物業労働者）——

飯田　鼎

一、はしがき
二、マルクスにおける賃労働史の問題
三、いわゆる「クラフト」の意義
四、クラフト・ギルドにおける矛盾と階層分解
五、クラフト・ユニオンの基礎と最初の団結

一

一般に、産業資本の段階においては職能別組合（craft union）の形態が支配的であり、資本主義が、十九世紀末、いわゆる独占段階に入るとともに、労働者階級の組織的運動のなかにある種の変化があらわれはじめ、不熟練労働者ないし半熟練労働者を中心とする一般労働組合（general union）があらわれてくる。そしてさらに産業別組合（industrial union）へと再編成されていくのが、労働組合運動の一般的法則的な発展であるといわれている。(1)

独占資本主義段階に至ってはじめてあらわれ、それに固有な社会経済的および政治的なさまざまな諸要因が、産業別組合

の発展を必然的ならしめていることはいうまでもないが、しかしそれは、あくまでも一般的法則として作用するにとどまるのであって、産業資本主義段階＝クラフト・ユニオン、独占資本主義段階＝ゼネラル・ユニオン→インダストリアル・ユニオンという公式が、そのまま、いついかなる場合にも貫徹するということはできない。

たとえば、わが国の場合をみるに、明治三〇年代にその生誕をみたクラフト・ユニオンは、はげしい弾圧とその後の運動の崩壊過程のなかで、次第に企業内組合への傾斜を強くし、とくに第二次世界大戦後の労働組合運動は、圧倒的な企業内組織として発展し、今日に至っている。このような労働組合運動における日本的特殊性といわれる現象が、何故にわが国のみに固有なものとなったのか。労働組合運動の発展は、わが国の特殊な事情の制約をうけながらも、その法則性は貫徹するということは否定できないのであって、この点はただ、わが国の資本主義の発展の特異性を論ずることだけでは解明しえない問題を含んでいるのではなかろうか。西ヨーロッパ、とくにイギリスの労働組合運動を、ひたすら典型的なものとして把握し、それをただ所与のモデルとしてうけいれるという消極的な態度[2]のために、それ自体のなかにひそむ特異性を追求することなく、ひたすらこれを理想化するという弊害を生み出したものであった。これは科学的な態度といえるであろうか。わが国の労働組合の特異性を明らかにする以上に、イギリスをも含めた西欧の労働組合運動の特異性をも、歴史的・理論的に明らかにする必要があろう。そうしてこそはじめてわれわれは、普遍性とは何か、特異性とは何か、その両者は、労働組合運動の場合にどのように絡みあい、どのような関係を保っているかが明らかにされるであろう。

（1）この点については、A. L. Morton and Tate: The British Labour Movement, 1770-1920, a history, London (Lawrence and Wishart), 1956, p. 129 ff. なおこの問題については、社会政策学会年報第十二集「経済成長と賃金」（お茶の水書房、一九六四年）の第二部「独占形成期における労働組合」が参考になる。

（2）飯塚浩二教授は、つぎのようなことをのべておられる。「わが親愛なる同胞の間に、物ごとのよしあしをはかるのに、妙に西洋を規準にしたがる癖があるからである。〝あちらでは〟をたいへんせっかちにもち出す。しかも聴く方も聴かせる方も実態をよく知らないことをいいことにして、ずいぶんご都合主義的な理想化をやっている。西洋人が敬けんなキリスト教徒だったり、戦時中の英国に食糧の買い出しや農家の売り借しみがなかったり、プロテスタントの国には犯罪が少なかったり、すでに中世封建時代から男性が女性を尊重したり、……ご本尊がきたら、ごじょうだんでしょうといったような西洋の過去・現在ができあがる。そうみていただければかたじけない、と当人がいいそうな〝他山の石〟である」（「日本の精神的風土」岩波文庫）。

二

労働組合運動の歴史を研究する者は、誰しも十八世紀後半から十九世紀にかけてのイギリス産業革命に注目するであろう。なぜならそれは労働者階級の組織の面でも、画期的な事件であったからである。それはいうまでもなく、繊維産業、とりわけ綿工業がその主軸をなしたものであり、近代的な機械制工場の確立は、綿工業から毛織物業へ、さらに機械および金属工業へと発展していくのである。しかしわれわれは、ここで産業革命期の労働組合を考察する場合、つぎのような点に注目する必要がある。すなわち労働組合というものは、その産業的発展の特異性――生産方法、原料および労働力構成もしくは立地条件――などに制約され、実にさまざまな径路を辿って発生したことである。

ウェッブ夫妻をはじめとする古典的な研究によれば、初期労働組合組織は、印刷工[1]、帽子製造工[2]、仕立工、織工[3]などの各種の職人の間に、労働組合の先駆的形態ともいうべき職業クラブが発生したことであり、綿業労働者や炭坑労働者の場合、組合の出現は比較的おくれたといわれる[4]。しかしながら、労働組合の発生は、いうまでもなく資本と賃労働との対立を前提としており、賃労働の形成および蓄積の過程およびその特殊性が、労働組合の発生史的意義を規定するものであることを忘れてはならない。そこでわれわれは、イギリスにおける賃労働関係の追求を、そこでの産業発展の過程に即して考えることにしよう。

イギリスにおいて、プロレタリアートは、いかにしてその階級的形成をみたのであろうか。このもっとも困難な社会経済

史上の問題に直面するとき、われわれは誰しもマルクスの「資本論」、第二十四章「いわゆる本源的蓄積」のなかの叙述を想いうかべるであろう。

「資本主義的生産様式の基礎を創出した変革の序曲は、十五世紀の最後の三分の一期および十六世紀の最初の数十年間におきた。サー・ジェームズ・スチュアートが適切にいっているように、『至るところで徒らに家や屋敷を充たしていた』封建家臣団の解体によって、一団の無保護なプロレタリアが労働市場に投げ出された。それ自身ブルジョア的発展の一産物だった王権は、その絶対的主権の追求において、この家臣団の解体を強行的に促進したとはいえ、決して唯一の原因ではなかった。むしろ王権および議会にもっとも頑強に対抗しつつ、大封建領主が、彼自身と同様に、農民も同じ封建的権利を有していた土地から、暴力的に駆逐することによって、また農民の共同地を横領することによって比較にならないほど大きなプロレタリアートをつくり出したのである[5]」。

すなわち、プロレタリアートの形成は、十六世紀における羊毛工業の発展――フランドルの羊毛工場工業（マニュファクチュア）の勃興とそれに対応する羊毛価格に刺戟をうけた大領主の土地収奪の結果であるということであり、それにさらに宗教改革とそれに伴う教会所領の大規模な盗掠とによって、新たな恐しい原動力を与えられたことによって、さらに尨大な貧民が生み出されたためであった[6]というのである。しかしてこのような貧民がどうなったかといえば、マルクスは、つぎのような有名な一節によって解答を与えている。

「かくして暴力的に土地を収奪され、放逐され、浮浪人にされた農村民は、奇怪凶暴な法律によって鞭打たれ烙印され、拷問されて、賃金労働の制度に必要な訓練を施されたのである。一方の極には、労働諸条件が資本として現われ、他方の極には自分の労働力以外には売るべきものをもたない人間が現われるだけでは、十分ではない。これらの人間が自発的に自分を売るように強制されるだけでも十分ではない。資本主義的生産の進行するに従って、教育、伝統、習慣によってこの生産様式の諸要求を、自明的な自然法則として認める労働者階級が発達してくる。成熟した資本主義生産過程の組織は、一切の抵抗を挫き、相対的過剰人口の不断の生産は、労働需給の法則を、したがってまた労働賃金を、資本の価値増殖慾に適合する軌道内に保ち、経済的諸関係の無言の強制は、労働者にたいする資本の支配を確証する[7]」。

いわゆる資本の本源的蓄積の秘密を、賃労働の蓄積のなかに見出したのは、マルクスの偉大な功績であった。しかしマルクスによれば、封建的家臣団の解体により、また発作的暴力的な土地収奪によって放逐された人々、この無保護なプロレタリアートは、それが生み出されたのと同じ速さでは、勃興しつつある工場制手工業（マニュファクチュア）によって吸収されることができず、そのためにこうした貧民たちは、群をなして乞食となり、盗賊となり、浮浪人となった。このようにして、十五世紀および十六世紀全体を通じて、西ヨーロッパ全体に血の立法がみられることとなったという結論が出てくるのである。

だがここで問題となることは、これらの浮浪人は、直接に無媒介的に賃労働者となったのではなく、いずれは、何らかの産業的発展のなかで、労働者の地位をしめるに至ったと考えられるのであるが、この場合、マルクスは、ただつぎのようにのべるにとどまっている。

「十四世紀の後半に発生した賃金労働者の階級は、当時及び次の世紀には、極めて小さな人民構成部分をなしていたにすぎなかったが、この部分は、農村における独立農民経営と都市の同職組合組織にとって、強くその地位を保護されている。農村でも都市でも、雇主と労働者とは社会的に接近していた。資本への労働の従属は形式的にすぎなかった。すなわち、生産様式そのものは、未だ何ら特殊的に資本主義的性格をもっていなかった。資本の可変的要素は不変的要素をはるかに凌いでいた。したがって賃労働に対する需要は、資本の蓄積が進む毎に急速に増大したが、賃金労働者の供給はただ緩慢にしかこれを追わなかった。国民的生産物の一大部分が、後には資本の蓄積基金に転化されるのであるが、当時はなお労働者の消費基本に入ったのである[8]」。

以上のマルクスからの引用が示すところは、賃労働の創出過程にかんする分析であるが、十四世紀以来、十八世紀末までの五世紀になんなんとする長い期間に、これらの無産階級の運命が具体的にどうなったのか、必ずしも明らかにされているとはいえないのではなかろうか。いわゆる残虐立法を中核とする「労働者の搾取を目指すもので、その進行中も常に労働者に対して敵対的だった賃金労働に関する立法」[9]の開始ともいうべき一三四九年のエドワード三世の労働者法以来、追い払われ、追い散らされた浮浪人の悲惨な生活については、まさしく「資本論」の生き生きとした叙述がこれを物語っているのであるが[10]、これとても、この当時の浮浪人が果してどのようにして諸工業に吸収されていったかを明らかにするものではない。

しかも何よりも問題なことは、この時期における賃労働の性格である。十四世紀から十六世紀の間――マルクスは、この三世紀間を賃労働の陶冶と鍛錬の時期としている――といえば、封建制の末期、つまり絶対主義の形成期ならびに爛熟期をふくむものであって、カウツキーの表現をかりるならば、まさに封建制と資本制とが必死になって闘っていた時期であった[11]。このときに、マルクスのいう賃労働とは一体、何を意味したであろうか。すでに十四世紀において賃労働が創出されたとすれば、これに対応するものとしての資本の性格は何か。彼は、十四世紀の後半に、領主の土地管理人としてのベーリフから転身した半借地農業者（メティエ）が、十五世紀の最後の三分の一期にはじまり、ほとんど十六世紀を通じて行われた農業革命の過程のなかで『資本家借地農業者』として成長する径路[12]を指摘している一方、産業資本家の形成は、「多くの貧弱な同職組合親方及び更に多くの独立小生産者が、あるいは、賃金労働者さえが、小資本となり、そして賃金労働搾取の漸次的拡大とそれに対応する蓄積とによって、資本家らしい資本家となったことは疑いない[13]」として、その多様な発生径路を示唆している。

しかしながら、この時代、すなわち十四世期から十六世紀の時期に、マルクスのいうように、「資本対賃労働」の関係が存在しえたとしても、これをもって直ちに資本制的な賃労働一般の範疇において把握することには、多大の疑問をのこすものといわなければならない。なぜならば領主の農業経営における危機的な労働力不足が深刻化したのはまさしくこの時期にあたり、賃労働はその当時、こうした領主的農業経営に照応するものであって、直ちにいわゆる工業労働力として充用されたとはいえないからである[14]。すなわち、十六世紀商業資本段階における商人資本支配のもとにおける賃労働と、工場制工業の支配的となった産業資本の段階における賃労働との間に根本的な差異があったことは注意されなければならない。

つまり、マルクスの「資本論」における賃労働の分析は、十四、十五および十六世紀についてはやや克明であるが、十七および十八世紀についての叙述はきわめて不完全であり、むしろほとんどみられないといった方があたっている。いきなり、「産業革命の時期＝機械および大工業」に飛躍しているところに問題があるように思われる。マルクスが、何故に敢えてこのような分析と叙述の方法をとったのかといえば、そこにはいくつかの理由が考えられよう。ひとつには、ポール・マントウも指摘しているように、資料の不足から「農村から在来の生活資料の一部もしくは全部を失った無数の労働者にとって、工業だけがひとつの行き先であったが、この求職人の移動を追求することは困難であったことによっている[15]。いまひとつは、マルクスにとって、資本の本源的蓄積の過程の分析という視角からみた場合、十七世紀および十八世紀よりもむしろ十六世紀がはるかに決定的な意義をもっていると考えたことによっているのではなかろうか。

(1) George Howell; Conflicts of Capital and Labour, 1890, p. 92.
(2) George Unwin; Industrial Organization in the 16th and 17th Century, 1904.
(3) S. and B. Webb; History of Trade Unionism, 1920, p. 46.
(4) G. D. H. Cole; An Introduction to Trade Unionism, p. 53.
(5) Marx/Engels, Werke, Bd. 23. (Das Kapital, Bd. I) SS. 745-746. マルクス「資本論」第一巻第四分冊（岩波文庫版）二七三―二七四頁。
(6) Ebendort, S. 748. 前掲書二七九頁。
(7) Ebendort, S. 765. 前掲書三〇八頁。

(8) Ebendort, S. 766. 前掲書三〇九頁。
(9) Ebendort, S. 766. 前掲書三〇九頁。
(10) Ebendort, S. 761ff. 前掲書三〇二頁。
(11) 十六世紀をきわだっている特色は、封建主義が、勃興してきた資本主義にたいして、死にもの狂いになって闘かったことである。十六世紀という時代は、封建主義と資本主義、この両者の性格をあわせもち、そのふしぎな混合をみせている。(Karl Kautsky; Thomas More und seine Utopie.) 渡辺義晴訳「トーマス・モアとそのユートピア」(東京教育書林)一九五七年、六頁。
(12) Marx/Engels, Werke, Bd. 23, (Das Kapital, Bd. I) S. 771. 前掲邦訳書三一六頁。
(13) Ebendort, S. 777. 前掲書三二八頁。
(14) この点については、岡田与好「イギリス初期労働立法の歴史的展開」(お茶の水書房)を参照。
(15) Paul Mantoux; The Industrial Revolution in the Eighteenth Century, 1955. 徳増・井上・遠藤訳「産業革命」(東洋経済新報社)一九六四年、二三六頁。

三

すでに指摘したように、マルクスの賃労働分析の視角は、イギリス絶対主義成熟期から十七世紀の市民革命までの大胆にして克明な記述を通じて、イギリス産業資本の創生期の秘密を衝き、これを暴露している点ではきわめて説得的であるが、この時期の賃労働が、そのまま産業革命期における、いわゆる産業資本の確立のための必要な前提としての賃労働に、無媒介的につながるような叙述の仕方は問題であり、すでにイギリス実証史学の研究成果からしても正しくないといわれている。[1] この場合、産業革命以前の賃労働の存在形態を問題にする以上、それは何らかの産業、もっとより狭くいえば職業(クラフト)との関連が、当然に重視されなければならないのであって、そういう問題意識から出発するならば、マルクスの描くような「農村からの貧民の流離」が行われていたまさにそのときに、都市においてはどのような形で、産業組織の発展および展開がみられたのかが研究されなければならない。なぜなら、囲い込みによって農村から追い出された貧民たちが、最終的にその安住の地を求めたのは、いうまでもなく都市であったろうし、その場合、都市の手工業職人の組織としてのギルドは、どういう状態にあり、これらの流入してくる貧民がどのような影響を当時の産業組織にあたえたか、このような点が考慮されなければならないと思う。それによってはじめて十八世紀産業革命開始期における賃労働の性格を明らかにすることができるのである。

もとより筆者はここで、封建的諸制度の解体もしくは農業革命の結果生じた尨大な貧民群が、どのような径路を辿って近代的プロレタリアートとして陶冶され、形成されていったかという、もっとも困難な問題を克明に追求しようとするものではない。これについては別の機会に論ずることとして、ここではイギリス労働組合の先駆的形態ともいうべき職人組合の発生の歴史を辿ることにより、その過程で自然に形成されつつあったクラフトというものの意味について考えてみたいと思う。

十五世紀から十六世紀にかけては、さきにふれたように、「資本の本源的蓄積」の時期であったが、同時に世界史上からみれば、それは地理上の発見の時代でもあった。地理上の発見は、経済史上、西欧諸国の商業活動自体に、さらにその基柢たる経済生活一般に深刻な革命的影響を与えることとなった。[2] これをより具体的にいうならば、西ヨーロッパの産業組織上、中世的なクラフツ・メンが、市場の拡大、資本のますます増大する利用、およびこれらの新しい諸条件と必然的に相関関係にある実業的な領域の発展の前に後退していった過程に関連があった。[3] ところでわれわれは、クラフツ・メンを、単純に手工業職人、あるいは工匠というように考えるけれども、わが国において、このクラフトという概念にぴったりする言葉を見出すことはできないし、すぐれて西欧的な資本制社会に特有な現象であるといえよう。

ではこのクラフトなる概念を、われわれはどのように理解すべきであろうか。いわゆる資本主義の発展にともない、分業

が進展するなかで、クラフトの概念もさまざまな変貌をとげ、クラフトなるものが、各労働者にとって固有の職業的意味をもちはじめるのであるけれども、いうまでもなくそれはすでに中世のクラフト・ギルドの発展にもっとも典型的にみられる。中世の都市においては非常に多くクラフツ・メン、すなわち織工、仕立工、靴工、肉屋、パン屋、大工、石工等々の集団が、生活を見出すことが可能であり、各クラフトは、村の各世帯が、みずからの労働をもってしては、非常に不完全にしか満たすことのできなかった欲望に応ずるために役立っていた。[4] クラフツ・マンが都市に生活していたという事実は、農村共同体（village community）の時期の残存物としての家庭生産が、手工業にとって代られたことを意味している。すなわち、中世の手工業職人は、いわば工業という処女地をきりひらくのに従事していた先駆者であるといえるのである。

しかし中世の末期になると、商業資本の浸透にともない、生産者と消費者との間に商人が介在し、商人が生産を支配するようになる。手工業職人が、直接消費者のために生産を営む形態を手工業制度（handicraft system）とよぶとすれば、商人のこの両者の間に介在する形態を家内工業制度[5]とよぶことが妥当であろう。しかし、このような家内工業制度の出現は、あたかも手工業制度が、農村の、都市によって代表されるより大きな経済単位への従属という一段階であった。[6] このような意味において、十五世紀以来、ヨーロッパ各地域の商業中心地のクラフツ・マンの団体は、商人の手を通じて遠隔の地に商品のための販売市場を見出したのだといえよう。手工業制度の社会的具体化としてのクラフト・ギルドが、崩壊と解体への途を歩みつづけたのも、こうした商業資本の制覇の過程を通じてであり、そしてまたその過程を通じて、階層分解もおしすすめられていったといっても過言ではない。

このクラフト・ギルドと労働組合との関係については、前者が後者の先行者であり、後者がその遺産と伝統の継承者であるとするドイツ新歴史学派の巨匠、ルードウィヒ・ヨハン・ブレンターノ（Lujo Brentano）と労働組合運動研究の先駆者ウェッブ夫妻（Sidney and Beatrice Webb）との間に論争があったことはよく知られている。結論的には、クラフト・ユニオンは、クラフト・ギルドの中世における役割をそのままうけつぐのではなく、むしろその分解の過程において発生しなければならなかった職人組合が、後の労働組合の継承者であることが定説となっている。[7] いうまでもなく労働組合運動は、明らかに資本と賃労働の対立が明白なものとなった十八世紀後半から十九世紀にかけて支配的な現象となったものであることはいうまでもないが、しかしイギリス産業の発展からみた場合、労働組合の発生の径路は実にさまざまであって、たとえば、非常に古い歴史をもつ毛織業と、主として産業革命以後、資本主義的経営の基軸となった綿業とでは、産業構造や歴史的な諸条件の相違から、近代的労働者階級の形式もいちじるしい差異がみられ、それはとりわけ産業革命期においてもっとも対照的にあらわれざるをえなかったのである。

しかしそれにもかかわらず、イギリスの労働組合（もちろん、イギリスだけでなく、ヨーロッパ全体に共通していることであるが）が、クラフト・ユニオンの形をとって現われ、わが国のように企業別組織としてあらわれたのではないことを考えるとき、クラフト・ギルドの消滅とともに、本来消えてなくなるべきこのクラフトが、何故に現在にまで生き長らえ残存しているかということに注目しないわけにはいかない。この秘密を明らかにすることなくしては、西ヨーロッパには何故に横断組合が牢固として根をはり、わが国においてはそのような条件が欠けているのか、その本質的な理由を不明確なままに放置することになるであろう。

いま、クラフトという概念を、一般的な訳語に従って技能もしくは技巧という意味に理解するならば、それは手の熟練を基礎とする家内工業労働を中核とする産業構造を想像せしめるであろう。従ってそれはやがて、マルクスのいわゆる「機械装置と大工業」のシュツルム・ウント・ドランクの前に、自然に消滅の運命をまぬがれることができない[8]と考えるのが普通である。しかしその後の資本主義の発展は、このような歴史にたいする公式的な解釈が必ずしも正しくないことを実証した。十九世紀末、資本主義が独占段階に至ってもなお、クラフトを基礎とする家内手工業制度が、ロンドンのイースト・エン

ドをはじめ各地に残存し、スタッフォドシア一帯のブラック・カントリーには、このようないわゆる小工業経営が大工業の組織と併存していることを示した。してみれば、いわゆるクラフトなるものが、何故に近代的な労働組合の基礎となったか、その理由は、とりもなおさず、クラフト・ギルドの解体後の職人組合によって、その後の小親方ないし日雇職人によって、そしてさらに近代的な賃労働者階級に伝えられたと考えることが妥当であろう。それは、資本主義の発展というものが、そのすさまじいばかりの技術的変革を絶対的な条件としながら、しかもなお旧来のもの、歴史的に伝承されてきたものを、根底から一掃するという方向をとらずに、むしろ生産技術上の問題として、たえず手の熟練に依拠せざるをえない部門を残すと同時に、資本の側の要請として、むしろおくれた生産様式の温存、その下請化をおしすすめることによって、低賃金政策の維持のために利用しようとする傾向をもっているからにほかならない。十九世紀中期にいちじるしい発展をみた全国的職能別組合には、一方において、少数の熟練労働力の担い手としての労働貴族的労働者と、他方、これに間接的に雇用される非常に多くの不熟練ないし半熟練労働者への分解というクラフトをめぐる大きな矛盾が胚胎していたのであり、これがやがて大きな問題となり、産業別組合へと発展するのである。この問題についてはいずれ別の機会にふれることとして、クラフトが、すくなくとも産業革命の前夜の段階において、労働組合の基本的契機であったことは、手の熟練を主要な生産技術の基礎としていた以上、むしろ当然であって、労働組合は実に数世紀にわたる長い産業的発展の過程で、このクラフトというものの分解と変貌とを通じて生成したものであることを物語っている。

ところでこのようなクラフトは、初期資本主義の段階以来、どのような変遷をとげてきたのであろうか。クラフトというものが、手の熟練および技能を基礎とするさまざまのきわめて狭い職種を意味する以上、㈠近似的なクラフトが結合したり、あるいは㈡ひとつのクラフト内部での階層分化がおこったり、あるいはまた㈢商人資本が、すでに経済的支配を確立していた手工業組織を吸収するというようなことは当然起りうるのであって、たとえば、相互の経済上の依存の状態を有利に発展せしめようとした例として、ジョージ・アンウィンは、一三七八年のロンドンの皮革クラフトの結合をあげている。[9] しかしより重要な意味をもっているのは、㈠よりも㈡および㈢の場合であって、たとえばすでに一三二七年に、ロンドンの馬具屋は、指物師、塗装工および四輪車製造工との間に、ロンドンの街頭において流血の激突をひきおこしたといわれる。これは、あとの方の工匠たちが、馬具製造の異なった部門に雇われていたが、馬具屋が、彼ら自身の職業に関係あるいかなる商品も、彼ら同士の間に売る以外に、ロンドン市の自由民その他に売ってはならないと誓わせたことに原因があったといわれる。[10] この場合はすでに、指物師、塗装工および四輪車製造工は馬具屋に従属しており、馬具屋は、取引力の点で他のクラフトのグループよりすぐれ、雇主としての優越した地位をしめつつあったことを物語っている。だがいまひとつ興味深い例は、ロンドンおよびパリの刃物業にみられる。

パリにおいては、ナイフの製造は㈠刃をつける刀鍛冶、㈡柄をつける刃物師、㈢鞘を供給する鞘師、によって行われていたが、完成品の販売を直接に行い、その商品の品質についての評価を一身にうけたのは刃物師であって、刃物師は、他のクラフトにたいして優越しており、一方において販売業者＝商人として、他方において雇主として振舞ったといわれる。[11] この当時、刀鍛冶は、ロンドン市長にたいし、田舎の刀鍛冶が、自分の商標に似た刀を刃物師に売りつける習慣ができていることを訴え、その職業上の利益の法的な保護を求めているが、結局、刃物師がこのような田舎の刀鍛冶の製品を買い入れないこと、刀鍛冶も、それぞれのクラフトの二人の親方の共同の助言がなければ、刀の価格をひきあげないという約束がとりきめられた。これによってみてもいくつかのクラフトのなかで、刃物師のそれが重要な地位をしめ、そのために刃物師が雇主のような地位をしめていたことがわかる。[12]

しかしながら、何といってもクラフトの変遷について古い歴史をもつものは繊維産業のクラフトであり、とくに毛織物業の製造に従事していた人々は、金属細工労働者や皮革工よりもはるかに卓越した地位をしめた点からみても、これを観察す

ることは是非必要である。

(1) モーリス・ドッブも、十六世紀および十七世紀のプロレタリアのかなりの部分が農業にその雇用の機会を求めたとして、つぎのようにのべている。「しかしながら、十六世紀とか十七世紀とかにプロレタリアートが人口の主な部分をなしていたと考えるのは、あやまりであろう。プロレタリアートの数はあいかわらず少く、その移動できる範囲はかぎられていた。というのは、所領地やわりあい大きいヨーマンの農場が、労働をもとめてもえられなくなるのを防ぐために、立案された法律上の諸制限があったし、また賃仕事を大部分ひきうけたのは、たとえ猫のひたいほどで、いつでもとりあげられるかもしれない土地であったにしても、まだ土地に愛着をもっていたひとびとであったからである（Maurice Dobb; Studies in the Development of Capitalism, 1946. 京大近代史研究会訳「資本主義発展の研究」II（岩波現代叢書）十三頁）。なお、岡田与好、前掲書参照。

(2) 大塚久雄「近代欧州経済史序説」（上巻）日本評論社、一九四七年、三―四頁。

(3) George Unwin; Industrial Organization in the Sixteenth and Seventeenth Century, with a new introduction by T. S. Ashton, 1963, London, p. 3.

(4) W. J. Ashley; An Introduction to English Economic History and Theory, Pt. II, p. 99.

(5) あるいはこれを Commission System あるいは Verlag System ともよぶ。

(6) Ashley; Economic History, Pt. II, pp. 8, 42, 220.

(7) これについては S. and B. Webb; History of Trade Unionism, 1920 を参照。

(8) 「作業道具とともに、それを扱う手練も労働者から機械に移る。道具の仕事能力が人間労働力の人的制限から解放される。それとともに、工場手工業における分業が基づくところの技術的基礎が廃棄される。したがって、工場手工業を特徴づける特殊化された労働者の等級制に代って、自動的な工場においては機械装置の助手の遂行すべき労働の均等化または水平化の傾向が現われ、人為的に作出された部分労働者の差異に代って、年齢及び性の自然的差異が主要なものとなってあらわれる」（Marx/Engels, Werke, Bd. 23 ― Das Kapital, Bd.I, S. 442. 邦訳「資本論」第一巻第三分冊、岩波文庫版、一八九頁）。

(9) Unwin; Industrial Organization, 1904, p. 19.

(10) Unwin; ibid., pp. 22-23.

(11) Unwin; ibid., p. 25.

(12) Unwin; ibid., p. 26.

四

ジョージ・アンウィンによれば、十二世紀にはすでに、服地市場の中心としての都市は、毛織物業の中心地となりはじめていたといわれる。[1] だが製造業の過程も次第に特殊化され、それぞれの過程が熟練労働者の個別の集団によって専門に行われるようになると、そこに織工（weaver）、縮絨工（fuller）、けば立て工（burler）、剪毛工（shearman）および染色工（dyer）などのいくつかのクラフトが生成した。いうまでもなく、織工がこのなかで特権的な地位をしめていたのは織布業が織物業において中枢的な役割によっていたのであり、一三〇〇年に定められた条令によって、この職業に従事しようとするすべての人々にたいして七年間の徒弟期間を強制し、ロンドン市長の監督のもとで、彼らのクラフトにかんするあらゆる問題について、正規の裁判権を付与されていたのも、この職種の重要性の証左であったといわれる。[2] だがここでも、商人資本の優越のもとで各クラフトの間に次第に利害の対立が明らかになりはじめた。たとえば一三三五年、織工たちは、織物商が、他のクラフトのメンバーによって資格を与えられていないのに、織物製造に従事していることを、ロンドン市長および市参事会に訴えているのであって、[3] このような対立の相様は次第に一般的になりつつあったかのようである。[4] 要するに、商人資本家としての、さらに雇主としての機能を確保しようとするひとつのクラフトの親方の、あるいは密接に結ばれたいくつかのクラフトの親方の、他のクラフトの親方にたいする抗争がはげしくなっていったのである。このような推移のなかで特徴的な現象は、織工がクラフトのなかで優越した地位をしめるようになり、とくにそのなかの富裕な人々が商人に転化し、やがて商人資本家が、この産業のあらゆる分野を完全に支配するようになったことである。[5] とはいえ、その他のクラフトが、織工のなかでの富裕な商人の支配に、直ちにそのまま服従していたと考えることは正しくない。フランスにおいては、十三世紀に縮絨工や織工の支配下におかれていた染色工の間から独立の気運が昂まり、ついに国王が、ひとつの工場内での二つの

クラフトの結合を禁止するが、他のクラフトのメンバーの仕事のうけわたしには干渉しないというようなことが行われた。[6]

これはひとつには、イギリスにおいてよりも、ヨーロッパ大陸の方が、封建制度が古典的に発達し、その体制に固有な工業組織としてのギルドの矛盾も、もっとも典型的な形で現われた結果にほかならなかった。たとえば、フランスにおいては、この当時、徒弟制度の強調によって、ひとりの若者は、二つのクラフトの親方になることは禁止されていたにもかかわらず、彼が親方の息子である場合には、自分が父親からうけついだクラフトと、新たに徒弟生活を体験することによって修得したクラフトを結びつけることができたといわれ、その結果、彼は二つのクラフトの親方たる資格をえたのである。[7] しかしこれは多くの弊害を生み出し、各クラフトは他のクラフトのメンバーの息子を徒弟としてうけるかどうかという問題がおこり、結局、一三七八年の織物業の場合、「ひとり以上の徒弟を採用すること」を禁止する条令が制定されたといわれる。[8]

このようなクラフト内部の矛盾、とりわけ繊維産業内部の独占化の傾向は、イタリー、スイス、ライン河畔、フランスおよびフランダース地方、プロイセンおよびシュレジアなどにも一般的にみられた傾向であって、ひとつもしくはそれ以上のクラフトの親方が、取引機能を独占化した他のクラフトの親方＝商人資本家に対する従属が深まっていったのである。これはさきにも指摘したように、大陸においては、封建制度がもっとも古典的な形で発展したために、その矛盾もまた、きわだってあらわれたのであり、中世的な生産組織が、多くの詩人や小説家の描くような芸術性そのものというのではなく、その背後には、激烈な利害の対立が渦まき、一見平和であるかにみえる共同体としてのギルド、メディーヴァリズムの象徴ともいうべきその制度の内部には、腐敗と汚辱がみちみちていたのであり、急速な分解過程を歩みつつあったのだということができる。[9]

このようにしてやがて織工のなかの富裕な分子が、いわゆる織元に転化し、縮絨工やけば立て工および染色工などが織工の組織に従属することによって、他のクラフトにたいする優越を獲得するところのクラフトの合同の結成に進むのである。われわれはここで、マルクスが、「資本論」第三巻第四編商人資本、第二〇章商人資本にかんする歴史的考察のなかでのべているかの有名な一節を想いうかべるであろう。

「封建的生産様式からの移行は、二重に行われる。生産者は農業的自然環境と同職組合的に拘束された手工業と対立して、商人および資本家となる。これが現実に革命的道である。あるいはまた商人が直接に生産を支配する。後の方の道は、いかに歴史的には移行として作用するとしても――たとえば、十七世紀のイギリスの織物業のように、彼は独立したままの織物業者を自己の統制下におき、彼らにその羊毛を売って彼らの織物を買いとる――それ自体としては、古い生産様式を変革するに至り得ず、むしろこれを保存して、自己の前提として維持する。たとえば、フランスの絹工業、イギリスのメリヤス及びレース工業における製造業者は、今世紀の中頃に至るまでなお大部分はたんに名目上の製造業者だったにすぎず、現実には織物業者には、その旧来の分散的な仕方で作業を続けさせ、自分は織物業者が事実上、彼のために労働する商人としての支配だけを行うというたんなる商人であった。このやり方はどこでも現実の資本主義的生産様式の進路を阻止し、そしてその生産様式の発展とともに没落する。それは、生産様式を変革することなしに、ただ直接生産者の状態を悪化させるだけで、彼らを直接に資本のもとに包摂されているものよりも、更に劣悪な諸条件のもとにあるたんなる賃金労働者及びプロレタリアに転化し、そして旧来の生産様式の基礎の上で彼らの剰余労働を取得する。[10]」

ここにのべられているように、「織物業者が、事実上、彼のために労働する商人としての支配だけを行うというたんなる商人」という革命的でない途こそ、筆者が主としてアンウィンの叙述をかりて分析してきた都市におけるクラフト・ギルドの崩壊過程に妥当するのであって、ひとり織物業のみでなく、商人資本による独占的な生産者支配は、十五世紀から十七世紀にかけて、あらゆるクラフトに避けがたい現象となったのである。たとえば、十七世紀イギリスのグロースターにおいては、金細工人、はんだ師、針金製造工、銅細工師、けば立て機製造工、ピン製造工および鉛管工が合同して、金属工カンパニーが結成されたといわれるが、[11] いうまでもなく、ここでも商人資本の力がこれを支配していた。

しかしながら、何といっても商人資本の優越がもっとも典型的にあらわれ、近似的なクラフトの結合が、その支配のもとになされたのは織物業であり、その団体としてのリヴァリ・カンパニー（Livery Company）であった。それはまさしく商人による生産者支配の独占的機構であり、リヴァリ・カンパニーを含めて十二のカンパニーが十六世紀には存在していたといわれる。しかも最初からそのメンバーの過半数は、貿易業者および商人から成っていた。新しい生産力の担い手たる人々によってではなく、マルクスがいみじくも指摘したように、「どこまでも現実の資本主義的生産様式の進路を阻止し、……生産様式を変革することなしに、ただ直接生産者の状態を悪化させる」商人としての資本によって支配されたところに、ギルド制度の末期的様相がみられた。

独占商人の生産者支配の機関としての十六のリヴァリ・カンパニーの矛盾は、金細工師（Goldsmith's Company）、小間物商人カンパニー（Haberdashers' Company）、毛皮商人カンパニー（Skinners' Company）、服地製造工組合（Clothworkers' Company）、呉服商カンパニー（Drapers' Company）および縮絨工カンパニー（Fullers' Company）、剪毛工カンパニー（Shearmen's Company）などにも、ニュアンスに多少のちがいはあったけれども、蔽いがたくあらわれはじめていた。[12] カンパニーの記録は、産業上の利益と商人との利益との間に生じつつあった闘争についての生々しい記録を示してくれるが、このような傾向は、イギリスのみならず、ヨーロッパ大陸においてもかなり一般的になりつつあったのである。[13]

このようにして、さまざまな原因が相重なり、早くも十四世紀の中頃から、西ヨーロッパのあらゆる工業地帯には、生涯を通じて職人たる以外に何の見込みもなくなった一団の労働者が発生したのであって、[14] その結果として、彼らの間にはしばしば職人組合が恒常的に存在するようになるのである。イギリスの場合、十五世紀から十六世紀にかけて、コベントリー、ブリストル、エクゼター、ヒアフォード、オックスフォード、ウィスベック、グロースター、プリマウス、チェスターなどの各地に存在したといわれる。[15]

しかしながら、この時点はまだ商人資本の段階であり、職人組合の組織自体も親方ギルドの支配のもとにあったのであり、日雇職人―小親方的な過渡的様相をおびていた。職人は、自分たちの利益を守るために団結しながら、同時に親方の組合としてのカンパニーに公然と真向から対立するのでなく、いわゆるヨーマン（yeoman）ないしバチェラー（bachelor）と称せられる独自の組織を雇主に認めさせようとしたのであって、職人のこの独立への要求をある程度満たすことによって、雇主としての親方、つまり商人資本家は彼らの抵抗[16]をやわらげようとしたのである。その意味ではこのヨーマンの組織は、一方における独立の組織でありながら、他方、カンパニーへの従属の形をとったのである。

だがわれわれは、このヨーマンの組織をどのように解決するかという点で二つの対照的な見解を見出すことができる。ウィリアム・アシュレーによれば、ヨーマンの組織は、ますますリヴァリ・カンパニーの支配のもとにおちいったけれども、しかしそれは十七世紀の終りまで存続し、やがてその分解の過程から労働組合が生まれるというのであるが、[17] ウェッブ夫妻は、このようなヨーマンの組織は、十六世紀の初頭になお、職人だけから成っていたのではなかったのであり、富裕な親方や商人のような階層が含まれていたところから、それをもって到底、労働組合運動の先駆者とはなしがたいというのである。[18] しかしこの両者の見解は、歴史的なひとつの側面を強調したにとどまっている。労働組合の発生の径路は、この両者を包括して十六世紀から十七世紀、そしてさらに十八世紀への産業的発展のなかでの、階層分解のより一層の進化のなかに求められるべきではなかろうか。

すでに指摘したように、カンパニーにおける商人資本の勢力の増大は、急速な勢いでクラフツ・マンの地位を低下させ、小親方としてのクラフツ・マンの没落を招いたのであった。それは同時に、これらの小親方層の職人たちにたいする支配が、次第にゆらいでいくことを意味したのである。これを職人の側からいえば、彼らの地位の向上を意味し、また事実、上昇の機会にさえ恵まれていたことも珍しくなかったのであって、[19] 彼らはいまや親方にたいして独立を要求し、彼らの家庭の

一員としての家族的従属の立場から、結婚して一戸を構え、みずから小親方として自立していくという事実さえみられたのである。このような現象のもっとも萌芽的なものは、すでに一三五〇年、ロンドンの織物のけばだて親方とその職人たちの間にみられたといわれるが、ひとり毛織物業のみでなく、他の多くの職種にもみられた。たとえば、一三九六年、ロンドンの馬具製造業における親方と職人の対立の如きもその例といえよう(20)。

（1） George Unwin; Industrial Organization in the 16th and 17th Century, 1963, London, p. 27.

（2） Unwin; ibid., p. 30.

（3） Unwin; ibid., p. 30.

（4） W. Cunningham; The Growth of English Industry and Commerce 1903, i, p. 189.

（5） Unwin; ibid., p. 32.

（6） Unwin; ibid., p. 33.

（7） Unwin; ibid., p. 34.

（8） Unwin; ibid., p. 35.

（9） モーリス・ドッブはつぎのようにいっている。「ギルドへの加入の条件を厳重にし、親方として独立するために入会金と負担金を強要し、「親方資格作品」にむつかしい条件をつけたので、財産をもたないひとが職人階級より上へと昇進する道がまったくとざされてしまう結果になった……。独占というものは排他性という意味がはいっているから、それと表裏をなして、保護されないところでの競争をつねにはげしくし、その結果、その経済状態を圧迫する。だから、ギルド独占の体制は、おしまいには資本主義産業にたいする障害物となったのだが、その当時には、境遇上、雇い主の意志にやむなく従わざるをえないひとびとの階級をばふやすという機能をしらずしらずのうちにはたした。ギルド体制が崩壊してしまったり、農村工業の成長と商人製造業者の発達とのために、ギルド体制にぬけ道ができたときですら、昇進の道は、最下層のひとびとにはほとんど拡げられはしなかった。手工業者の数がふえてくると、かれらは独立をうしない、半プロレタリアートの状態になり、運転資本をえることができないために、資本家に従属し、しだいに負債でしばられた。どこででも生産にたいする資本の支配力が増大したために、徒弟の数はふえたが、それは、たとえ以前には出世しようという野心をいだいていたにしても、いまでは一生涯、賃金労働者に甘んじなければならないひとびとの数をふやすことになっただけであった。」（ドッブ、前掲邦訳、十二頁。）

（10） Marx/Engels; Werke, Bd. 25. 邦訳「資本論」第三巻第二分冊、岩波文庫版、一一〇七頁。

（11） Unwin; ibid., p. 38.

（12） Unwin, ibid., pp. 44-45. アンウィンは、つぎのようにこの間の事情を説明している。「商人による金細工師カンパニーにたいする支配と職工（artificers）のこれにたいする完全な従属は、手工業（handicraft）にその源を発し、もしくは手工業的要素をふくんだところの、十二の大カンパニーのそれぞれにひとしく並行的にみられるところである。小間物商カンパニーは、この後の方に属していたのであって、一五〇〇年に、帽子製造業者およびその商人の組織を吸収したのち、小間物商人組合（Merchant Haberdashers）と名のったのである。前者は、金細工師に加えて、洋服商（merchant taylor）、毛皮商人および織布工であった……。毛皮商人のカンパニーは、ずっと以前に、商人および雇主の階級の手におちた。そしてエリザベスの治世には、毛皮をはぐ工匠（the artisan skinner）は、彼らの利益が、全く代弁されていないという理由で、別個の特許状を国王に請願した（Livery Companies Commission, ii, p. 388, cited in Unwin's Industrial Organization, p. 44）。

（13） インナマ・シュテルネッグは、一三七八年、フライブルクの場合についてつぎのように印象的にのべている。「しばしば武器製造職人（Waffenhandwerker）、すなわち、ブリキ工、甲冑師、かぶと鍛冶工等が、ひとつのツンフトに合同をすることがおこなわれた。しかしそれは、非常に強力な、はっきりとした職業的権能をもっていたのだが（aber mit streng geschiedener Gewerbebefugnis）。原料の買い入れの場合におけるツンフトの組合員の先買権というものもまた――必要以上にひとつの職種の職人がその原料を獲得するのだが――強い者に有利に出来ていたツンフトの基本的原則によって、逆に弱者の業務上の抑圧という順序に従うのである」（Karl Theodor von Inama-Sternegg; Deutsche Wirtschaftsgeschichte in den letzten Jahrhunderten des Mittelalters, Leipzig, 1901, Bd. III, Zweiter Teil, S. 70.）

（14） これについてはわれわれは、E. Lipson; The Economic History of England, Vol. I. (Middle Age), 1929. のなかの「クラフト・ギルド」とくに p. 343 以下にくわしい叙述をみることができる。

（15） Unwin; Industrial Organization, p. 50. またアンウィンは、つぎのようにのべている。「他の証拠は、ロンドンにおいて、ずっと以前から注意されていた初期の例のほかに、同じような団体が、十五世紀および十六世紀において、少なくとも八つの他の主なロンドン・カンパニーに存在していたことを証明している……。ロンドン以外には、すでに注意したエクセターを除いて――今やブリストル、コヴェントリー、オックスフォードの三都市に、このような団体の明瞭な存在の証拠を示している。オックスフォードにおいては、靴製造業に目扉職人の団体を発見するのであるが、その親方が特に例外的に富裕であった職業ではなかった」（W. J. Ashley, Economic History, Vol. II. 野村兼太郎訳「英国経済史及び学説」、岩波書店、一九三三年、二八五頁）。

(16) さらにアシュレーはつぎのようにのべている。「一四一五年に、ロンドンの市長および長老に、「ヨーメン仕立職人」と呼ばれていた裁縫工のある雇人と日雇とが、「彼らの目上の者やその職業の親方の意志に反して、市中にさまざまな住宅をもち、居住し」、またそこで種々なる会合を催したということがのべられた。彼らは、最近国王の臣民、殊に「その職業の親方の一人をうちたたき、虐待した。その上、彼らは、平和の妨害者を市の警吏の手から救おうとして毎日努力した。その組合の親方と監督とは強情な職人を従順にすることはできないことをのべた。そこで市長は、その職人の代表者を数名召喚し、彼らにあるきびしい訓戒をあたえた。彼らはその毎年の会合において、特別の衣服すなわち組合制服を着用してはならず、なおまた、彼らは、実際いかなる会合をも催すことを全く禁じられたのである」Ashley; ibid. 邦訳二八五―二八六頁）。なお、一三八一年の農民一揆のこれらの日雇職人にたいする影響について、アシュレーは、「一三八一年の百姓一揆は、おそらく都会の日雇職人のなかにも、地方の隷農のなかの動揺に似た動揺を生じたであろう。この頃には、彼らはすでに多数の団体をつくっていた。彼らは甚だしく蹂躙されたり、又は甚だしく酷使されたりしたことはなかったらしいが、しかし依然として、親方には決してなれそうにもないということを自覚し、もしも彼らの物質的地位が改善されるべきであったとしても、それは日雇職人としてでなければならないことに気づき、そして今やこのような改善を獲得することは、彼ら自身の力に依存するという新しい観念をもって活動したように思われる。その協同的行動、示威運動、仕事にたいする合同の拒絶、すなわち同盟罷工は、特別の訓練を要せずして、賃金の値上げまたは、その他の労働状態を得る有望な手段であり、またすでにのべた如く、これらの方法は、他の職人団体によって三〇年以前に採用されていた」(Ashley, ibid., 野村訳二八八―二八九頁)。またこのような日雇職人と農民とのこの時期における共同闘争の興味ある叙述については、H. Fagan and R. H. Hilton; The English Rising of 1381, 1950, London, p. 108. 以下を参照。

(17) Ashley; ibid., Pt. II. pp. 107-116.

(18) Webb; History of Trade Unionism, 1920, pp. 4, 5 and Note.

(19) Unwin; p. 53.

(20) A. E. Bland, P. A. Brown and R. H. Tawney; English Economic History, select documents, 1914, p. 138.

五

周知のように、毛織物業は、イギリス資本主義発展の道程において、商業資本から産業資本の段階への推移を、もっとも鮮烈にそしてユニークにうつし出した産業であった。従ってそこにこそ、産業資本家の発生とならんで、それと対立する賃金労働者も、炭坑夫、農業労働者等よりもはるかに早く出現した産業でもあったといわれる。[1]

しばしば指摘されるように、十五世紀の末期になると、クラフト・ギルドの内部に発生した矛盾が明瞭となり、ギルド制度を基礎とする都市の毛織物業も次第に停滞の傾向を示すようになった。つまり織布業の発展は、生産の急激な増加をよびおこすとともに、ギルド的な規則に制約された都市の産業は、そのような急激な増加に応ずることができなかった。ギルド的な規則、制約、財政的な負担、急騰する生産費および生計費、これらがギルドのメンバーの前途を暗くしつつあったことは、一方において、都市工業の衰亡の象徴であるとともに、すべて田園地帯に確固たる基礎をおろしつつあったマニュファクチュアの競争に直面しなければならなかったことを意味していた。ヒートンは、ヨークシアの毛織物の推移についてふれ、ヨークを中心とする都市毛織物工業が衰亡に向わなければならなかった理由を克明に分析しているが、[2] ヨークを中心とする都市の織物業との裏腹の関係において、ウェスト・ライディングの田舎や地方都市がこれに代り、毛織物業の中心となる傾向を示した。十六世紀のはじめまでに、毛織物工業の大部分はすでに農村に移り、そのために、ヘンリー八世の治世の最初の数年から、エリザベスの即位までの間に、このような農村の毛織物業の競争にたいして、都市の製造業を保護するために、実に多くの立法が制定されたのであったが、農村が織物業の中心地となったことは紛れもない事実であった。このような都市と農村との対立としてあらわれた毛織物業内部の競合関係は、農村の低賃金労働にたいして、都市の貧民労働力が、その背後にひとつの大きな条件として存在していたことを忘れてはならない。すなわち、旧来のギルド的な都市の毛織物製造業が救貧法のもとにおける貧窮徒弟から、その安価な労働力を供給されたのに反して、農村の織物業の親方、つまり織元こそ、農耕と結びついたいわば半農半工的労働力に依存していたからである。

われわれはここで、産業資本家のもっとも萌芽的な形態ともいうべき織元（clothier）という階級にはじめて出合うのであ

るが、彼らは毛織物業にいそしみ、各地に散在している織工の小屋の中で行われる織布業を支配するという家内工業制度を確立せしめた。してみれば、この十六世紀にはすでに、マニュファクチュアが、農村の各地に散在していたように考えられるであろう。しかしそれにしても大規模なマニュファクチュアは、その名前は残っているけれども、その存在については、あまりはっきり知られていない。[3]

しかし一五五五年の条令は、工場制度の存在が、濃厚となりつつあったことを物語るものとしてよく知られている。[4]だがこのような条令にもかかわらず、北部ヨークシア地方には、およそ工場＝マニュファクチュアと呼ぶにふさわしいものは出現していなかったと考えられている。その理由についてヒートンは、つぎのようにのべている。一五五五年の条令には毛織物業にかんする限り、反資本主義的な当時の時代精神があらわれていること、ヨークシアの織元は貧しいので、工場を設備するほどの資本に乏しいというのであり、アシュレーによれば、かりに修道院などに利用して工場を建設したことがあったにしても、それは例外的であり、[5]ヨークシアにおいては十八世紀、産業革命期に至るまで家内工業制度（cottage industry）が支配的であったという。北部の織元が、その家族か、精々一人ないし二人の雇人をおくとすれば、織元はみずから羊毛を買い入れ、織工あるいは織布販売人として活動したのであり、企業の規模が大きくなり、つまり数人の紡毛工、織工が雇われるようになると、原料の確保や製品の販売などにたずさわったのである。これらの人々は、織元の家で働き、雇主としての織元の監督をうける場合もあったが、大抵は彼らの小屋で行われていたのである。[6]

すなわち、アシュレーとヒートンとは、マニュファクチュアの存在について対照的な見解を披瀝しているわけであるが、この点についてはあとでふれるとして、要するに、ヨークシアの織元と南西部の織元の相違は、規模の問題であり、大経営者、富裕な織元が、ソマーセット、ウィルトシアなどの南西部諸州に多かったのに反し、ヨークシアの織元は規模が小さく、且つ貧困であったことである。そしてこの明瞭な対比は、産業革命までつづくのである。[7]

以上のように、十六・七世紀のヨークシアにおける織元の状態は、概して「独立小生産者」的であり、これに比較すると、東部たとえばサフォークの織元が「たんなる雇主ではなしに最大の資本家」であり、[8]また西部地方の織元が、「十六・七世紀においては、この地方においても、ヨークシアにおける如く、「小織元＝小生産者が農村地域に広はんに存在する一方、そうした半農半工の織布工層のなかから、たえず裕福な「大織元」＝地主・問屋織元が分出されていった」[9]というヨークシアと東部地方の織元との過渡的形態を示していたのに反し、デヴォンシアを中心とする南西部諸州の織元は、「従来、農村都市として発展してきた都市内部に、商人による生産支配が確立したことによって、これら商人＝織元の寡頭支配を法制的に確認すべき段階に到達していた」[10]というように、その経営の形態および規模にはさまざまなものがあったことがわかる。しかし全体として、この織元が、十六世紀の末頃からいちじるしく産業資本家的相貌をおびてきたことが注目されるであろう。ところで問題は、このような毛織物業のイングランド各地における展開のなかで、賃労働は一体、どのような存在形態を示し、やがて十八世紀になっておこってくる初期労働運動のための前提を形成していったのであろうか。とくにどのようにして、クラフト・ユニオンへの方向に進んだのであろうか。

マルクスは、マニュファクチュアが、「資本主義的生産過程の特徴的形態として支配的に行われるのは、おおよそ十六世紀の半ばから十八世紀の最後の三分の一期に至る本来の工場制手工業時代のことである」[11]とのべている。この場合、マルクスは、マニュファクチュアの発生が二重の仕方で行われることを説いているが、[12]毛織物業の場合、マルクスのいわゆる本来的マニュファクチュアが存在したかどうかが問題となる。「同一資本の指揮のもとにおける種々の手工業の結合」[13]という点ではたしかに毛織物業にも妥当するけれども、しかし十六・七世紀の農村工業における織元と織布を中心とする生産関係に、いわゆる本来的マニュファクチュアが支配的であったということについては、すでに指摘したように、アシュレーらの批判がみられる。しかし毛織物業のように技術的に一個所に労働者を集中することが困難であるか、もしくは敢えてそれを

やったにしても、いちじるしい不利を被るような場合においては、それが問屋制前貸をとったとしても、事実上の資本と賃労働の存在が確認される以上、機械制大工業の前段階としてのマニュファクチュアに生成しつつあるものであるということが正しいと考えられる。[14] ところでこのようなマニュファクチュアの広はんな存在は、資本と賃労働との関係を、どのような形で特徴づけたのであろうか。

すでにのべたように、十四世紀から十五世紀にかけて、クラフト・ギルド内部の矛盾がはげしくなり、その折から、そうした特権化した都市のギルド支配から逃れて、農村にその生活と仕事の場をさがし求めた職人層が次第に増加し、十五世紀末期から十六世紀にかけてのイギリスに支配的となった。ヒートンの叙述によれば、この当時のヨークシア西部の小生産者層の規模は、労働者は平均五人、このなかには職人自身およびその家族の労働も含まれるのであって、小幅織機一台をそなえつけることによって、刷毛、紡糸、織布をおこない、通常一週に一反の織物を仕上げていたといわれる。労働力が不足する場合は、他所から徒弟一人、紡ぎ女二人程度雇われたのであって、このような小生産者層――小ブルジョア層[15]は、イングランド各地に、かなり広はんに存在していたとみられる。しかしこの時点では、貧しい織元も富める織元も、その性格に質的な相違がみられたわけではなく、やはりヒートンによれば、彼らもやはり雇主であると同時に労働者であり、職人や徒弟および婦人労働者も雇うけれども、そこにまだ画然たる階級的区別が明瞭にあらわれなかったのであって、[16] それが、資本と賃労働という対抗関係として明確にあらわれてくるのは、市民革命後のマニュファクチュアの全国的展開の過程を通じてであったといえよう。

この場合、農村工業の基盤の上に展開される毛織物マニュファクチュアは、当然に、親方―職人―徒弟という序列をともなうものであり、従ってクラフトそのものもこれとともに伝承され、且つギルド制度の衰退とともにきえうせずに、むしろ産業革命期までに見出されるということ、新しい農村工業を基礎とするマニュファクチュアにとっては、このような過程が必然的に要請されなければならないという事実は、注目されなければならない。

これについて大塚久雄教授は、その理由をつぎのようにのべている。㈠技術が手工業段階にある場合、技能習得あるいは熟練のためには、どうしても何らかの形で、徒弟制度が必要であること、㈡さらに産業資本が幼弱な段階では、いわゆる原生的な賃労働がどうしても必要である。[17] つまり織元にしてみれば、みずから家族労働を主とする小生産者の地位から、マニュファクチュア経営者に、そしてより大規模な経営者に経上るためには、どうしてもこのような機構が必要であったのであって、とくにかつてはみずからもその一員であったかもしれない職人と徒弟こそ、労働力の中核的存在であったのである。いうまでもなく織元とは、紡毛、織布、縮絨、仕上げの各工程にわたって毛織物の製造を監督し、これらの労働者を雇用するものであって、その場合、労働者を雇用する形態としては、㈠直接、自宅もしくは自己の作業場において労働者を雇う場合、㈡前貸制によって間接に労働者を雇う場合の二様の存在形態が考えられる。[18] だがさきのマニュファクチュア論争とも関連して、この両者の存在は、これを機械的に分離して考えるのではなく、マニュファクチュアと問屋制との絡み合いのなかから、産業資本家としての織元と賃労働者との関係を検出することが望ましいものである。

まず第一に、毛織物製造にかんするさまざまの行程のうち、選毛、刷毛、紡毛の各準備工程は、あるいは織元によって問屋制的に雇用される農家の婦人・児童らによって下請化され、もしくは独立小生産者によって担当される部分が多かったが、仕上げ、染色等の最終工程は、織布業者によって兼営されたり、毛織物商によって行われる場合が通例であった。そして何よりもまず、毛織物製造工程中、『主要且つ最も純正なる部分』とされる織布工程における織機の同一職場内への集積と、そこにおける労働者の協業という事実に、マニュファクチュア検出の焦点を合わせるべきであるとすれば、[19] 当然のことながら、このような毛織物のマニュファクチュアが十七世紀の市民革命以後、急速に発展し、[20] それにともなって、小生産者層の分解は進み、それはまた賃労働者層を増大せしめたのである。こうした賃労働者はまた、それがマニュファクチュア期にお

ける生産関係によって特殊な刻印をうけざるをえないのである。マルクスはつぎのようにいう。「マニュファクチュアはそれが捉えるべき手工業において、手工業経営が厳格に排除したいわゆる不熟練労働者の一階級を産み出す。工場制手工業が全労働能力の犠牲において全く一面化された専門を特技の域にまず発展させるとすれば、それはまたあらゆる発展の欠如をひとつの専門たらしめることも始める。等級制的区分とならんで、熟練労働者と不熟練労働者との簡単な区別が生ずる[21]。しかしマニュファクチュアはただ単純に、熟練、不熟練の等級的編成を必然化するのみならず、徹底的に分業化をおしすすめることによって、「工場制手工業に特有な分業による協業が再現するのであるが、しかし今では部分作業機の組み合わせとしてである。種々の部分労働者、たとえば羊毛マニュファクチュアにおいては、打毛工、梳毛工、剪毛工、紡毛工等々の特殊の道具はいまや、特殊化された作業機の道具に転化し、その各々が、結合道具機構の体系における特別の一機能のため特別の一器官をなす[22]」。

このようにして、マニュファクチュアは、種々の部分労働者をつくり出すのであるが、こうした部分労働者はひとつには熟練労働力の担い手であり、徒弟および婦人を主力とする単能工を補助労働力として、マニュファクチュア生産の基柢をなしていたし、従って彼らの間にもっともその熟練、もしくは技術、つまりクラフトにたいする自負が強かったと考えられねばならない。もちろん、これらの熟練労働者、いわゆる多能工といえども、はじめは、簡単な工程の技術の修得からはじまって、個人的能力に応じて、つぎつぎに技術的分業の諸工程を習得し、同時に労働者としての身分も上昇して、ついに一製造業の全工程について技術の習得にともないつつ、たえざる身分的上昇がおこなわれていたわけであった。しかしすべての労働者が単能工→多能工→親方という上昇コースを歩むのではなく、むしろ永久に職人としてマニュファクチュア親方のもとで働かざるをえない階層が出現したのである[23]。そしてそういう階層からはじめて近代的なクラフト・ユニオンが発生したのである。

毛織物業において、従ってまたすべての労働者のなかで、もっとも早く団結に成功した例として、梳毛工の組合[24]をあげることができる。梳毛労働者は、羊毛工業のなかで特別の位置をしめていた。かれらの職業の特殊な作業が、一定の修得された熟練を必要としたのである[25]。そして少数であったため、入れかえるのはかなり困難であった。都市から都市へ職を求めて遍歴する習慣[26]なので、ひとりの親方の自由になることは少く、ここに次第に職能別の横断組合への途が開かれるのである。こうして、この梳毛工の団結は、やがて織布工に及び、十八世紀頃には、南部諸州、ディヴォン、ソマーセット両州の織布工の間に、職能別組合が結成されたのである。毛織物業ばかりでなく、十八世紀半ばをすぎると、炭坑労働者、石炭運搬船の船員の間にも公然たる団結がみられるようになり、またアンウィンによれば、一七七七年には帽子製造工の組合が確認されたといわれる[27]。このようにしてマニュファクチュアの広はんな展開の上に、職能別の労働者の団結が一般にひろく存在するようになったのである[28]。

（1）Paul Mantoux; The Industrial Revolution in the Eighteenth Century, An Outline of the Beginnings of the Modern Factory System in England, translated by M. Vernon, 1955, London, p. 83. 徳増栄太郎、井上幸治、遠藤輝明「産業革命」（東洋経済新報社）一九六四年、八六頁。

（2）H. Heaton; The Yorkshire Woollen and Worsted Industries, from the Earliest Times up to the Industrial Revolution, 1920, London, p. 47 f.

（3）Heaton, ibid., pp. 88-90.

（4）織布工条令（An Act touching Weavers）には、つぎのようにのべられている。「従前の議会においても、また現議会においても、わが王国の織布工たちが訴えていたところによれば、富みかつゆたかな織元たちが、あるいは彼らの家々の内部に数々の織機を設け、雇職人および不熟練なる人々にこれを充用せしめつつ、以て機織の技能に習熟せる多数の職人とその家族を破滅せしめ、あるいはまた幾多の織機をその掌中に集め、貧しい職人たちにたいし、彼らが自身を、ましてや妻子、家族を扶養しえざる程の不当な賃料でこれを貸し、あるいはまた毛織物の織布および製造にたいして、従前よりはるかに少額の工賃を与えるにすぎないため、彼らはみずから習熟せる職業をまったく棄て去らざるを得ざるに至った……」（A. E. Bland, P. A. Brown, R. H. Tawney; English Economic History,

Select Documents, London, 1914, p. 320.)。

(5) W. J. Ashley; Economic Organization of England, p. 150.

(6) Heaton; ibid., p. 91.

(7) Heaton; ibid., pp. 92-93.

(8) 飯沼二郎、富岡次郎「資本主義成立の研究」未来社、一九六〇年、五六頁。

(9) 前掲書八五頁。

(10) 角山栄「デヴォンシァにおける毛織物工業の発展――《中世―一六五〇年》、経済理論、四五号、四六号、一九五八年、(飯沼、富岡、前掲書一一四頁参照)。

(11) マルクス「資本論」第一巻第三分冊、岩波文庫四八頁。

(12) 前掲書、四八―五〇頁。

(13) マルクス、前掲書、四九頁。

(14) 角山栄「イギリス毛織物工業史論――初期資本主義の構造」ミネルヴァ書房、一九六〇年、二一五―二一六頁。

(15) 西洋経済史講座――封建制から資本主義への移行II、資本主義の発達(岩波書店)、一九六〇年、総説の部。

(16) Heaton; ibid., p. 97.

(17) 前掲、西洋史講座(II)総説二八頁。

(18) 角山氏、前掲書、一二四頁。

(19) 前掲、西洋史講座(II)山之内靖「国民的産業と資本主義の展開」一〇八―一〇九頁。

(20) 前掲、「西洋経済史講座」大河内暁男「市民革命以後におけるマニュファクチュアの成長」参照。

(21) マルクスは、つぎのようにのべている。「マニュファクチュアは、それが捉えるすべての手工業において、手工業経営が、厳格に排除したいわゆる不熟練労働者の一階級を生み出す」(資本論、第一巻第三分冊、七二頁。「本来のマニュファクチュアは、以前は独立していた労働者を、資本の指揮と規律とに服せしめるのみではなく、その上に労働者そのものの間の等級制的編成をつくり出す」(前掲八八頁)。「マニュファクチュアは、労働者の等級制的編成とともに、不熟練労働者との間の単純な区分をつくり出すのではあるが、前者の優勢なる影響によって後者の数はなお甚だしく制限されている」(前掲書、一〇二頁)。

(22) マルクス、前掲書、一一九頁。

(23) 西洋史講座(II)、一八八頁。大河内論文。

(24) 一七一八年、政府は、非常に多くの梳毛工や織布工にかんする布告を発した。それによれば、彼らは、非合法にも共通の紋章を用い、法人として活動すると考えられた非合法的のクラブや団体を結成した。」(Unwin's Industrial Organization, p. 226.)

(25) John James; History of the Worsted Manufacture in England, from the Earliest Times, London, 1857, pp. 250-251.
ジェイムズはつぎのようにいう。「この世紀――十八世紀のはじめ以来、梳毛工は、強力な、組織的な団体となった。彼らはしばしば、動揺、ストライキおよび従順でない行為によって、雇主にたいして、多くの困難をひきおこした。賃金をひき上げるために、これらの労働者たちは、職業の利益を犠牲にしてまでも、彼らの長子以外に、徒弟をとってはならないという規則をつくった。なぜならば、人手を制限することによって、賃金は上昇し、従って商品の価格も上ったからである。この梳毛工の例は、すぐさま織工によって模倣された。彼らは、その賃金率のみならず、その労働の生産物が売られねばならない価格をさえ制限しようとしたのである」。

(26) リプソンはつぎのようにいっているのは印象的である。「梳毛工は、織工よりもよい立場にあった。彼らの数は制限され、彼らの仕事は、より高い報酬をもって報いられていた。彼らはひとつの特定の地方にしばられていなかったし、仕事を求めてひとつの場所から他の場所へと転々とさまよい歩き、旅する慣習があった。こうした放浪生活のひとつの理由は、彼らの多くが独身者であることにもよっていた。そしてその故郷において仕事が乏しいとき、彼らは、飢餓をさけるためには低い賃金をもうけいれなければならなかったのである。放浪している間中、彼らが属していた制度によって保護されたのだ。なぜなら、梳毛工組合(the Combers' Union)は、賃金のきり下げに甘んずるよりもむしろ無為のうちに彼らを養うことをえらんだのである。梳毛工が旅に出ようとしたとき、彼は、そのクラブから、彼が組合のメンバーであり、正しい振舞いをし、且つ正直な人間であることを証明する証明書をうけとった。この証明書は、彼に、その支部に属しているあらゆる梳毛工の組合からの援助をあたえ、且つ彼に、王国中を旅し、それぞれのクラブで世話をしてもらえる資格を与えた……」(E. Lipson; The History of the Woollen and Worsted Industries, 1921, London, pp. 66-67.)

(27) Unwin; Industrial Organization, p. 214.

(28) これについては、つぎの史料が参考になる。David C. Douglas; English Historical Documents, Vol. X. 1714-1783, pp. 484 ff.